

2011 年度教団付置研究所懇話会自死問題研究部会に参加して 堀内みどり

2月22日午後、標記研究部会が「災害対策における宗教の役割」をテーマとして、本願寺間法開館で行われた。

東日本大震災では、多くの宗教者による支援活動が進められてきた。その一方では、依然として山積する課題が様々あり、自死（自殺）によって命を失う被災者もおられる。そのような状況下で、宗教者はどのように支援をしてきたのか、また、今後何が必要なのか。こうした問題意識のもと、「自死問題研究部会では、災害対策活動を、ひろく『命を支援する活動』と位置付け、このたび、各教団における1年間の震災復興支援の取り組みを明らかにした上で、反省点を共有し、中長期の展望を明らかにするための報告会」を今回開催した。

まず、鎌田東二京都大学こころの未来研究センター教授が「宗教者による災害対策活動」と題して、基調講演を行った。鎌田教授は、時代はどんどん破壊的になる。3.11はその兆しともいえるとした上で、宗教者が“災害”をどう捉えてきたのかを概観。その上で「オウム真理教」「スピリチュアル」「心なおし」等々に表象される現代をどう捉えていくかなどに触れ、「スパイラル史観」（歴史は一方的に良くなっていくわけではなく、また一方的に悪くなっていくわけでもなく、スパイラル式に進行していく）を提示した。

その後、孝道教団の岡野正純氏をコーディネーターとして、東海林良昌雲上寺副住職（浄土宗・浄土宗総合研究所）が「被災地での支援活動と私一個人・副住職・青年会役職者として」、保科和市氏が（立正佼成会教務局社会貢献グループ次長・中央学術研究所）が「東日本大震災における立正佼成会の救援・復興への取り組み」、伏見英俊氏（真言宗智山派・智山伝法院）が「真言宗智山派における災害対策の取り組み—なし得なかったことへの反省から—」、金沢豊氏（浄土真宗本願寺派・教学伝道研究センター）が教団の緊急支援活動について、その内容と課題、展望について、それぞれ発題された。

南米出張調査報告

野口 茂

3月4日から19日までの間、南米ベネズエラに出張し、現地の社会変動および宗教事情調査にあたった。とくに今回の出張では、昨年より開始したキリスト教系教育支援 NGO “FE Y ALEGRIA”（信仰と悦び）に関する調査を継続して行うことができた。

同 NGO は、1955年カラカス市の低所得者居住区（スラム）に、イエズス会のホセ・マリア・ベラス神父によって小学校が

開設されたことが嚆矢となった。当時のベネズエラは、石油開発を軸に急激な経済成長を遂げつつあったが、一方でその恩恵を享受できない貧困層が増加し、首都のカラカス周辺にはスラム街が拡大していた。経済的・社会的理由から教育の機会を奪われているスラムの子供達に、教育の場を提供し貧困の連鎖をくい止めたい。そしてキリスト教精神に基づいたモラル教育により、子供達の人格形成にも寄与したい。そのような思いから、カトリック大学の学生ボランティアとともに、ベラス神父が小学校の開設に踏み切ったのだった。

設立から57年を迎えた現在では、ベネズエラ国内に170の教育施設の他、ラテンアメリカ17カ国に合計1,800カ国以上の関連施設を設けるまでに至っている。詳細は、研究報告会で改めて報告する。

第247回研究報告会

第4回南・東南アジア地区宗教学宗教史会議

（4th SSEASR International Conference）に参加して

堀内みどり

3月21日に標記研究会が行われ、昨年6月30日から7月3日にかけて、ティンブー（ブータン）で開催された標記会議に参加し、発表した時のブータンの様子について報告した（出張についての報告は本誌141号に掲載しましたのでご参照ください）。堀内は、1日に「ヘランブについての宗教的一考察（A Religious Study of Helambu）」と題して発表した。1978年7月天理大学ふるさと会から海外研修基金でネパールに行ったとき、ヒマラヤの山麓にあるヘランブという村の「ナラ祭」に出会った。ヘランブへの途上はチベット仏教とヒンドゥー教の文化の差異や融合を見聞することができる。また、ヘランブはシェルパ族の村としても有名で、シェルパ独自の文化とチベット仏教両方の特徴を知ることでもある。今回はこの「ナラ祭」における「女の部屋（家）」のことを念頭において発題し、祭りの夜に寺院前で行われる若い男女の踊りや歌の掛け合いに、まるで「歌垣」のような印象をうけたと述べた。

報告会では、ブータンを概略し、今回の会議で触れたブータンの人、生活、宗教などについて、写真を示しながら紹介した。ブータンは自然保護、伝統文化の維持、開発をGNH（国民総幸福量）という理念によって進めようとしている。若い国王に対する信頼度や人気は高く、これからどのように開発を進めるかは世界が注目している。

伝道研究会開催

「天理教の海外布教における文化活動」

森 洋明

3月28日、「天理教の海外布教における文化活動」をテーマとした伝道研究会が開催された。今回は海外で展開されている天理教の文化活動について取り上げていく。その第1回目として、高橋利行氏（海外部元ヨーロッパ・アフリカ課長・前日仏文化協会会長）が、海外部で以前に開催されていた「文化活動担当者会議」でまとめられた報告書に基づきながら、そこに日仏文化協会の現場からの視点を合わせた発表を行った。

今日も海外の多くの布教拠点で、さまざまな文化活動が展開されている。研究所ではこうした文化活動のあり方を検証するため、実際に関わった人や現在も関わっている人を招き、文化活動の役割や将来的な課題などについて考えていく予定である。

Saburo Yagi — The Path Towards Normalization (3) Core Ideals of Welfare for the Disabled

Since the International Year of Disabled Persons of 1981, the social environment for disabled people has been changing rapidly. The driving force of this change is the ideal of normalization, which took shape under the vision of N.E. Bank Mikkelsen of Denmark in 1959. This ideal does not seek to “make the disabled closer to those with no disability and thereby render them normal.” Rather, it argues that it is the society’s responsibility to create a living condition for the disabled in the same way as those of others; further, “normalization” is defined as making it a norm for the disabled people to live their lives in conditions similar to those of other people.

This living condition refers to “receiving an education, working, participating in leisurely activity, participating in social life, voting, moving, living as free citizen without segregation, living together with those of the other sex, having a sex life, getting married and having children, and having the right to receive social services as needed.”

第 248 回研究報告会 (4月 13 日)

台湾の宗教

佐藤浩司

私が台湾と関わりをもったのは、昭和 50 年、天理大学のクラブである雅楽部が、第 1 回海外公演を、韓国、香港と巡り、台湾にて行ったのが初めてである。この時は、台北市内と、姉妹校である中国文化学院（現大学）にて公演を行い、その後、救国青年団のお世話で、最南端の鵝鑾鼻を経て東部を花蓮まで北上、中部横貫道路を通って台中に入り、台北へ戻るといふ大旅行を行った。その折に触れた美しい自然と美味しい中華料理は、いまでも思い起こすことのできる刺激的なものであったが、何より観光地として訪れた道教や仏教の宗教施設でみた、夥しい数の仏像や神像と、それを熱心に礼拝し祈りを捧げる姿を目の当たりにして、何か慕わしく嬉しい気持ちになったのが忘れられない。その後、雅楽部としては、第 4 回（昭和 56 年）、第 6 回（昭和 61 年）の海外公演の折、台湾を訪れているが、日程的にタイトであったがため、見学の時間があまりとれず、観光ルートである龍山寺にそのつど訪れ、参拝者の賑わいが相変わらずであったのが印象深い。

昭和 53 年から翌 54 年までの約 1 年間、前述の中国文化学院へ、交換教授制度によって赴任した。滞在中、休みを利用して台湾各地の主立った寺廟を見学することにした。大学の本務は宗教学科であり、教育研究と学内行政に携わっていたが、おやさと研究所に兼務して、どちらかという研究所の仕事が主であった。研究所の設立の目的が、いわば海外伝道のために伝道地のあらゆる分野について調査研究すると共に、伝道における当面する具体的な問題にこたえることにある。台湾において生活する好機であるから、台湾社会の宗教と、そこに生活する人々の信仰について具に見ようと思った次第である。その中でも、台南の東嶽廟（嶽帝廟ともいう）における、亡くなった人、殊に不慮の事故や病気で亡くなった人を、地獄から救い出し天国へ送る儀式は、烏頭法師による一種の道教儀礼であるが、儀礼後に確かに天国へいったかを確認するシャーマンである童乩の存在とともに興味をそそり、以後、日本へ戻ってから毎年通って調査することにした。この調査研究は、後に、『Tenri Journal of Religion』の 23 号に「亡魂救済の儀礼『超昇』について」、及び『天理台湾研究会報』の創刊号に「台湾のシャーマニズム」として発表した。

昭和 55 年、中国文化学院へ交換教授として赴任したもので「天理華岡会」を結成、同窓会であるとともに台湾研究の場とした。同じ頃、天理教海外布教伝道部（現海外部）に台湾事情勉強会「榕樹の会」が発足、天理における台湾研究の萌芽となった。これを礎となって、平成 3 年、天理台湾研究会が発足、平成 8 年に天理台湾学会と改称して、日本、台湾の研究者のみならず、英米在住の家研究者も会員として擁する国際的な学会となった。

さて、台湾は、日清戦争後の明治 28 年から、第二次世界大戦敗戦後の昭和 20 年までの約 50 年間日本が領有することになった。当然のことながら、少なからず台湾の人々に影響を与えた。この問題について、塚本照和元天理大学教授を首班として研究をすすめることになり、私は、日本及び統治の直接担当

機関である総督府の宗教政策とその影響について調べることになった。幸い、当時の文部省の科研費を 2 回頂戴して、研究をすすめることができた。これは『報告書』として少数の部数ではあるが出版した。私は、「日本植民地時期台湾における統治年表（試案）」を作成し、掲載した。台湾は、日本にとって初めての植民地である。このため、諸外国が行っている植民地政策の具体的な事例を検討し、独自の統治政策をもって臨んだことが、閣議や国会の審議を通じて法制化されていく過程を公文書を調べることにより分かった。その中で、日本の法律制度とは別に、台湾総督府が独自に府令をもって統治できるとする「六三法」や「三一法」の制定が、台湾統治にどれだけの影響を及ぼすことになったかということが明確になった。宗教政策としては、当初、現地の信仰を認める緩やかなものであったが、昭和 7 年の盧溝橋事件に始まる日中戦争、そして日米開戦となる過程の中で、日本では国体明徴が叫ばれ、植民地では皇民化運動が展開されることになり、急進的な政策が採られるようになった。台湾では、国語教育の推進や、正庁改変、神社参拝の強要とともに、台湾の特に漢民族土着の信仰の寺廟を整理統合する政策が遂行された。これは、日本の国会で問題となり、実態調査を台北帝国大学が行うことになって収束することになるが、ある村では全ての寺廟を廃止し、道教の神像を焼却する「昇天祭」なるものを執行している。私は、台南における寺廟調査を行う中で、台南市役所に、戦前に寺廟の調査がなされ台帳が保存されているを知った。お願いをして、5 冊ほどある台帳を全て複写することができた。これをみて分かることは、かつてあった寺廟で整理されたものに赤ペンで斜線が入れられ、土地、建物の所属が寺廟の管理委員会から市尹すなわち市長に変えてあったことだ。これをもとに、沖縄で開かれた南島史学会で「皇民化運動と寺廟整理」の題目で研究発表を行った。台北帝大に寺廟整理の実態調査が依頼され、実際に担当したのは土俗人類学教室の講師であった宮本延人氏である。その報告書が台湾の中央研究院に所蔵されていることを劉枝萬教授の紹介で知り、複写を頂戴して、宮本先生にお届けした。この報告書に、宮本先生による台湾の宗教の概要を加え、伝道部の助成を得て『台湾における寺廟整理』（天理教道友社）として出版した。

日本統治時期の台湾における宗教政策については、台湾におけるこの分野の研究では第一人者と目されている蔡錦堂国立台湾師範大学教授の好著が出版され、いわば私の出る幕がなくなったのである。もともと伝道について考察することが研究の目的であったので、天理教の、台湾における伝道の歴史と、教えの何が受け入れられているのかを調査研究することにした。まず、中山正善二代真柱の海外伝道に対する施策と台湾における巡教について調べることから始めた。二代真柱は、台湾に伝道庁を設けた。天理教が一派独立して設けられた教区制度では、台湾は福岡教区の中に入っていた。当時の、通常の日本の考え方では、台湾は北海道と同じ外地ではあるが、日本の領土であるので不思議ではない。しかし、二代真柱は、アメリカやブラジルと同じく台湾に台湾伝道庁を設けたのである。これは、天理大学の前身である天理外国語学校に、設立に当たっては、政府との難しい折衝の末、当分の間の但し書きを付されながらも朝鮮語部を設けたのと同じ発想である。平成 17 年、台湾で開催された第 15 回天理台湾学会で、その一部を発表した。↗

連載執筆のねらいと執筆者紹介

天理参考館所蔵の漢族資料

本連載では、天理参考館（以下、当館）所蔵の漢族資料を紹介する。当館は生活文化資料・考古美術資料など数十万点の資料を収蔵しており、その中で漢族関係の生活文化資料は約9,300点となっている（2012年3月時点）。今回はその中から看板、玩具、版画、大型資料等について述べる。単なる資料の説明のみにとどまらず、収集の経緯やコレクターに関する話題にも触れたいと考えている。

なお、実物をご覧になれば一層理解が深まるので、なるべく現在展示中の資料を取り上げたい。本連載が当館をより楽しんで頂く一助となれば幸いである。

中尾徳仁（なかお のりひと）

1999年より天理大学附属天理参考館学芸員。海外民族室に所属し、民国期の中国民具資料（主に玩具、版画、看板）を研究している。主要論文は「蘇州桃花塢と南通の民間版画工房」「天理参考館報」(第20号、2007年)「満洲における郷土玩具収集—日本人コレクターの活動に焦点を当てて」『日本人の中国民具収集—歴史的背景と今日的意義』(風響社、2008年)など。

「おふでさき」の有機的展開

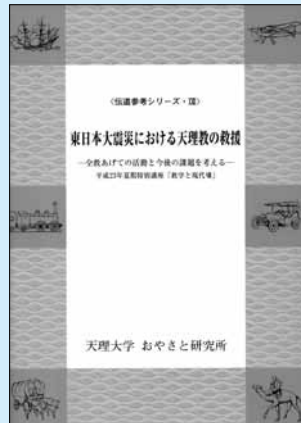
本連載では、天理教原典の一つである「おふでさき」を第一号より順次学び、その現代的な意義について考究する。「おふでさき」から人生訓を得る読み方、観察される信仰者の行為を理解するための手がかりとして読む方法、あるいは、「おふでさき」を幕末・明治初期の大和言葉や方言を知るための資料として取り扱う方法など方法論は様々であるが、本連載では第一に「おふでさき」を親神の言葉として読む。「おふでさき」を通して神に触れようとする一青年の思索と実践を記述したい。

深谷耕治（ふかや こうじ）

2012年米国パークレー神学校連合大学院宗教学科修士課程卒業。専攻は宗教社会学。

台湾における天理教の伝道は、明治29年からであるから、その歴史は長い。しかし、日本の敗戦による日本人の総引き揚げは、天理教における台湾伝道の頓挫を意味した。台湾の人を会長とした嘉義東門教会と斗六教会を除いて、日本人が会長であった教会は全て引き揚げることになった。昭和36年、二代真柱の『論達第二号』による再度の海外伝道の打ち出しによって、台湾も伝道が再開し、現在では、22の教会と50余の布教所、8千人を超えるようぼくが誕生している。台湾は、日本語のできる世代から、台湾語、中国語の世代に転換している。その意味で今、台湾における伝道は、岐路にあるといえる。この時、台湾における伝道を振り返り、今後のあるべき姿を模索することは、大切である。そのために、現地のニーズを探求するとともに、現地の状況、特に人々に受け入れられている宗教と信仰について考察することが喫緊の課題である。今回の研究報告は、「台湾の宗教」がテーマであるが、今後の課題としてとりあげた次第である。

新刊案内



『伝道参考シリーズXXIII 「東日本大震災における天理教の救援—全教あげての活動と今後の課題を考える—」(頒価800円)

本書は2011年8月27日、「おやさと研究所夏期特別講座」として標記のテーマを掲げて開催した「教学と現代VIII」の内容をまとめたものである。より多くの人々に関心をもっていただきたいの思いから、今回の発行になった。

おやさと研究所事務局、天理大学売店（テンフィフティー）、道友社各販売所でお求めいただけます。



『天理大学 おやさと研究所年報』第18号

本書には5本の論文をはじめ、2011年の研究報告会での発表の要旨、研究所の活動記録、また史料紹介や研究所員の動向が掲載されている。

本書を希望される方は、おやさと研究所事務局へお申し出ください。また公開教学講座（開催日に関しては最終ページのポスターを参照）の会場でも入手できます。バックナンバーもあります。

『グローバル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名(フリガナも)、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮下さいようお願い致します。振込みを確認後、発送させていただきます。

送料（ヤマト運輸メール便）

全国一律、A4（角2）厚さ1cmまで（10冊まで）80円でお届けします。

11冊以降は160円になります。

例 毎月1～10冊購読 80円×12カ月＝960円

毎月11冊～購読 160円×12カ月＝1,920円

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町1050

天理大学 おやさと研究所 「グローバル天理」編集部

FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp